



## 理想のがん診療をめざして

当科は、各専門診療科・診療部門と連携して京大病院がんセンターにおける抗がん薬治療の運用が安全かつ適切に行われるよう、基幹診療科の機能を担っている。また、がん診療においては、診療科横断的および職種横断的な業務もきわめて重要であるため、スムーズな運用ができるようにその調整も行っている。実際のがん治療には多種多様な知識や技術が要求され、治療成績向上のためには、抗がん薬治療や手術治療、放射線治療を併用する「集学的がん治療」が必要となる場合も少なくないため、当科は関連診療科と連携し、集学的がん治療を実践している。

### 代表的診療対象疾患

胃がん、大腸がん、食道がん、膵臓がん、胆道がん、肺がん、頭頸部がん、原発不明がん、希少がん

## 診療体制と治療実績

### 沿革と診療体制

がん薬物治療科は、2013年4月に設置された新しい診療科である。2012年9月に京都大学大学院医学研究科に開設された「腫瘍薬物治療学講座」が中心となり、がんに関連する寄附講座やプロジェクトのスタッフがこの診療科に加わっている。現在は診療科長を含むスタッフ11名体制で、主に消化器がん、頭頸部がん、肺がんの診療を行っている。

がん薬物治療科のめざすべき診療方針は、京都大学がんセンターの中心的役割をなすとともに、入院・外来そして緩和とあらゆる面でシームレスかつ最良の医療を提供することである。また、原発不明がんや希少がんなど、これまでどの診療科が対応すべきか苦慮したがん種に対しても、各臓器別診療科との連携を密にし、患者さん中心の医療を提供すべく努力をしている。外来診療は、積貞棟1階にて外来化学療法を中心に行っている。

入院診療は、積貞棟2階の集学的がん治療病棟を担当し、さらに呼吸器内科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科との連携により、専門性の高いがん薬物治療も行っている。



## 臨床研究の取り組み

### あらゆる角度から研究を推進

当科では、がんの発生メカニズムの解明から、早期診断法の開発、新規治療の開発など、基礎研究および臨床研究をあらゆる角度から幅広く進めている。なかでも食道扁平上皮がんにおいては、アルコールによる発がんメカニズムを解明し、予防法の開発をめざしている。また、新しいコンセプトに基づいた根治的がん治療法の開発、分子生物学的技術を用いた個別化医療開発、抗がん薬による臓器障害を予防する支持療法の開発、腎障害など臓器障害を有する患者さんに対

する薬物治療の開発などを、さまざまな関係診療科、学内外の研究室と連携して進めている。



局所遺残再発食道がんに対する新規光線力学的療法